

## 私の神我一体観の体験

五井 昌久

## 天の私（真我）と地の私がついに合体する

……自然はなんて、美しいのだろう、私は自然の美しさの中に半ば融けこみながら、世の中から病苦を除き、貧苦を除かなければ、この美しさの中に全心を融けこませるわけにはゆかないのだなあー、と自分の責任でもあるような痛い声を心のどこかできいていた。

私はその声に応えるように、「神様、どうぞ私のいのちを神様のおしごとにおつかい下さい」と、いつもの祈りを強くくりかえしながら歩いた。そのまま向う岸へ渡る舟着場まで来て、土手を降りようとした瞬間「お前のいのちは神がもたらした、覚悟はよいか」と電撃のような声がひびき渡った。

その声は頭の中での声でも、心の中の声でもなく、全く天からきた、意味をもったひびき、即ち天声であったのだ。それ

れは確かに声であり、言葉である。しかし、後日毎朝毎晩きかされた人声と等しきひびき、霊言ではなかった。私はそのひびきに一瞬の間隙もなく「はい」と心で応えた。

この時を境に私のすべては神のものとなり、個人の五井昌久、個我の五井昌久は消滅し去ったのである。しかし事態が表面に現われ始めたのはかなり日時がたってからであった。

私はひととき、土手の下りぎわで、じいっと眼を閉じたまま何も想えず立ちすくんでいたが、やがて夢から醒めた人のように眼を開けた。太陽は白光さんと輝いている。小鳥のさえずりも耳もとに明るい。私は一時の緊張で堅くなった体を両手で交互にさすりながら、渡し舟に向っていった。

「私のいのちはもうすでに天のものになってしまったのだ、この私の肉体は天地を貫いてここにいるのだ」私の心は澄みとおつていて、天声に対する何の疑いも起こさなかった。……

（…中略…）

と云う体験から、その間幾多の霊的修業をさせられて、現在の私になる直前、即ち、

……私は例のごとく就寝前の瞑想に入った。想念停止の練習により、私は直ちに統一することができる。その夜統一したと思うと、吸う息がなくなり、吐く息のみがつづいた。すると眼の前に天までもつづいているかと思える水晶のように澄みきった太く円い柱が現われ、私は吐く息にのり、その太柱を伝わって上昇しはじめた。

（…中略…）

七つ目の金色に輝やく霊界をぬけ出た時、全くの光明燦然あらゆる色を綜合して純化した光明とでもいうような光の中に、金色に輝く椅子に腰かけ、昔の公卿のかぶつていたと思われる紫色の冠をかぶった私があった。あつと思ふ間もなく、私の意識はその中に合体してしまった。

合体した私は静かに立ち上がる。確かにそこは神界である。様々な神々が去来するのが見える。

天の私（真我）に地の私が集まりてとどまっているこの現実、霊的の神我一体観がついに写実的の神我一体として私の自意識が今確認しているのである。

想念停止の練習時にはもう少し上（註・奥に）に、もう一段上に自己の本体がある、と直感しながら今まで合体できなかったその本体に、その時正しく合体したのである。わがうちなる光が、すべての障害を消滅せしめて大なる発光をしたのである。その時以来、私は光そのものとしての自己を觀じ、私の内部の光を放射することによって、悩める者、悲しむ者を救い、病める者を治しているのである。

天とは人間の奥深い内部であり、神我とは内奥の無我の光そのものであることも、その時はつきり認識した。

（…中略…）

……想念停止（空觀）とは、空そのものが終局ではなかったのである。空になるとは現象的、この世的すべての想念を一たん消滅し去って、その「空」となった瞬間、眞実の世界、眞実の我がこの現象面の世界、現象面の我と合体して、天地

一体、神我一体の我が出現してくるのである。真我の我とは一体何か。神我であり、慈愛であり、調和であり、自由自在な心である。……

という体験を経て、最後に

……瞑想してややしばらくした時、眼の前がにわかにならぬ光明に輝いてきた。私は想念を動かさず、ひたすらその光明をみつめている。すると、前方はるか上方より、仏像そのままの釈尊が純白の蓮華台に結跏趺坐（けっかふざ）されて降りて来られ、私のほうに両手を出された。私も思わず、両手を差し出すと、如意宝珠（にょいぼうじゆ）かと思われ、金色の珠を私の掌に乗せて下さった。

私は何も想わず押しただき、霊体の懐におさめた。その後、現象界で云う、おさかきのような葉を五枚下さって、そのまま、光輝燦然と消えてゆかれた。私はしばらく釈尊をお見送りする気持で瞑想をつづけていると、今度は、やはり光り輝やく中から、金色の十字架を背負ったイエス・キリストが現われたとみるまに、私の体中に真向から突入して来て消えた。その時、*“汝はキリストと同体なり”* という声が激しく耳に残った。私のその朝の瞑想は、その声を耳底に残した

まま終わってしまった。

私は深い感動というより、痛いほどの使命観を胸底深く感じていた。そのことが単なる幻想でないことを、私の魂がはっきり知っていた。*“汝は今日より自由自在なり、天命を完うすべし”* という内奥の声を、はっきり聞いていたからである。私は直覺的にすべてを知り得る者、靈覚者となっていたのである。

私はその日から表面は全く昔の私、つまり、靈魂問題に夢中にならなかつた以前の私に還元していた。私はすべてを自身の頭で考え、私自身の言葉で語り、私自身の手足で動き、私自身の微笑で人にむき合った。私の眼はもはや宙をみつめることもなく、私の表情は柔和に自由に心の動きを表現した。私はもはや神を呼ぶことをしなかつた。人に押しつけがましく信仰の話をしなくなつた。父母にも兄夫婦にも弟にも、昔の五井昌久がよみがえつてみえた。柔かな、思いやり深い、気楽で明るい息子が冗談をいいながら、父の脚をさすり、老母の肩をもみほぐす毎夜がつづいた。……

五井昌久著『天と地をつなぐもの』から抜粋